

ブオ (シャマン) の守護霊と文化伝承 —オンゴディン・タブン・テングリ祭祀を中心に

サランゴワ

はじめに

内モンゴル東部に位置するホルチン地方の師弟関係にある現役の男女 2 人のブオ(シャマン)がそれぞれの守護霊の指示に応じて祭祀儀礼を合計で 3 度行った。初回と 2 回目は、2 人のブオと一緒に儀礼を行い、3 回目はそれぞれが個々に旧暦 9 月 9 日に行ったオンゴディン・タブン・テングリ (守護霊の 5 つの天神) 祭祀儀礼について現地調査で得た一次資料に基づいて取り上げる。

これまでのシャマニズムの研究は、ブオをブオたらしめている科学的に実証困難な守護霊を真正面から取り上げることが敬遠されてきた。守護霊は、ブオの知識と知恵、霊能力の源である。ホルチン地方のブオの守護霊は亡きブオの霊が主流で、これ以外、虎、狼、鳥、蛇、狐などの補助霊がいる。亡きブオの霊の記憶は、生前から死後、そして今まで続いている。祭司を務めた 2 人のブオの守護霊は、生前仲のよいブオ同士だった。死後も霊界で仲間同士である。しかしながら、「宗教家も宗教研究者も、死者の存在様態や死後生のことを語るのを不思議なほど避ける」[棚次 2012 : 23]。守護霊と人間世界、霊界のコミュニケーションの在りようを事例に基づいたミクロの視点で見てみる必要があるのではないと思われる。ブオにとって、守護霊は生々しい現実としての存在である。先学では、人間が主となり、人間側のことを中心に取り上げるのが圧倒的である。しかし、現地のブオと住民にとって、守護霊と自分たちの関係の中で、守護霊が主体で、中心である。こうした守護霊を主体に考えてみたい。

オンゴディン・タブン・テングリ (守護霊の 5 つの天神) 祭祀儀礼が行われた当時の夜、両守護霊がそれぞれの乗り物であるブオに同時に憑依して語り合った内容が伝統文化と民族の歴史の伝承にいかなる役割を果たしているかを明らかにしたい。

1. オンゴディン・タブン・テングリとは

天神は、モンゴル人の信仰の中で最高の神である。天を tengri(テングリ)と言う。テングリは、天神を意味するほか、天界をも指す。一般的に、天神が 99 あると言われるが、それより最も多く存在すると言われる。次に述べるオンゴディン・タブン・テングリについての情報は、オンゴディン・タブン・テングリを守護霊の意志によって、3 年間続けて祭った男女 2 人のブオ本人の語りと守護霊の語りによるものである。月亮¹ブオは、1954 生、女性、農民。ブオにした守護霊は、父方の祖父で

¹ 本論で登場するブオの名を仮名にする。

ある。長年のブォ病を経て、1994年に1人前のブォとなった。もう1人のブォは、月亮ブォの弟子である金宝ブォ。彼は、1967年生まれ、農民、二十歳で失明。2002年、月亮ブォに弟子入りして、2006年成巫。2007年結婚。妻は、1976年生まれで、2007年ブォとなった。

テングリ（天神）の中に、ブォの守護霊を守護し、力を与えるオンゴディン・タブン・テングリとある。直訳すると、守護霊の5つの天神である。オンゴディン・タブン・テングリは、5つの方向に位置する天神で、それぞれ色で示されている。南→赤（火）、北→緑（水）、中→黄色（土）、西→白（金）、東→青い（木）である。五行思想を示すが、天のそれぞれの機能が異なるという。

月亮ブォと金宝ブォによれば、オンゴディン・タブン・テングリとホルチン・ブォの関係は以下のようである。

- ①すべてのブォの守護霊が、オンゴディン・タブン・テングリとコンタクトをとることができない。
- ②力のある守護霊がオンゴディン・タブン・テングリのところに届くことができ、そこから力を得る。
- ③象徴として、それぞれの方向の天神がそれぞれの方向を象徴する旗を賜る。その旗を守護霊が自らの乗り物（後継者）であるブォに作らせる。調査している限り、現在、ホルチン地方で5つの旗を有するブォが2人いる。月亮ブォと金宝ブォである。



（図1）月亮ブォ



（図2）金宝ブォの守護霊が治療を行なっている。

2. ブォの知識・術の伝承

ホルチン地方では、ブォの知識と術は、人間と霊界、すなわち、人間と霊両方から伝承されている。主に、師匠と守護霊の教え、ブォ個人の努力が含まれる。

（1）ブォ同士の伝承

- ①現役の師匠から弟子へ（師質相伝）伝承。師弟関係は、循環性を持った因果関係である。

モンゴル語に「1代の父母親、10代の師匠」という言い回しがある。一見、師匠に敬意を払った表現のように見えるが、シャマニズムにおいてまた別の意味があり、ブォの伝承と関係がある。

1) 亡きブォの霊が、生前の仲間の乗りもの（現役のブォ）に自分の乗り物＝後継者を弟子入りさせる。ホルチン地方で、ブォの守護霊が、自分が選んだ後継者を「ウル・フルグ」と言う。ウルは子供で、フルグは乗り物の尊敬語。すなわち、子なる乗り物という意で、ブォの身体を乗り物として使うためである。

2) 生前の仲間の乗り物が亡くなると、その次の乗り物が自分の乗り物に弟子入りする。ブォ同士の縁が死後、守護霊になった後も乗り物を通じて何代も継続することを意味する。

②老ブォから若いブォへの伝承。

③若いブォ同士の伝承。

修行中の若いブォ同士がそれぞれの守護霊との関係や守護霊の教えた内容、およびいろいろ聞いた内容を広く交流することによって知識と情報を共有するようになる。

(2) 守護霊の教え

①夢、②靈感、③耳のそばに教える、④トランス状態で教える、⑤目の前に絵や映画のように出現。

(3) 家族内伝承

祖父母や親がシャマニズムについての知識やエピソードを子孫に言い聞かせることで伝承する。

(4) 民間における伝承

師匠ブォ、弟子ブォ、家族、クライアント、民衆がブォのエピソードについて語り聞かせることで伝承する。

3. 月亮ブォと金宝ブォの守護霊の紹介

主に、守護霊が乗り物である現役のブォに憑依して1人称で語った内容に基づいている。

(1) 月亮ブォの守護霊の生前と死後の経歴

名前：

両親が名づけた名前：アミンプヘ（寿命が強いという意）。

社会が名づけた名前：アミンオルト（寿命が長いという意）。この名前が与えられた原因は、全身を火で焼かれる火の試練で無事だったことにちなんでいる。

民族：漢民族、本籍は山東省済南府（現・済南市）。月亮ブォにルーツを確認した。

性別：男性、年齢は、生前から今まで、150数歳。守護霊は、自分の年齢については語っていないが、月亮ブォによるものである。

苗字：胡。

月亮ブォとの関係：守護霊によると、生前5人の息子、1人の娘がおり、月亮ブォは末息子万寿の末

娘である。娘を漢人の養の行商に嫁がせた以降、一度も実家に戻って来なかった。

乗り物：今まで、2人を乗り物、すなわち後継者にしている。月亮ブォは2番目である。

生前の居住地：最初はボ王旗（現・ホルチン左翼後旗²）のボルホドグ村に住んでいた。その村は現在、ダルハン旗³に含まれる。

識字者：『ブォの4冊の本』⁴の内容を知っている。

成巫：ボ王旗で17歳の時成巫、守護霊はモンゴル人。わしは、非世襲型ブォ。

死後：ブォのあの世で修行を行っている。

霊力：治療能力、予知、予見、透視、テングリ（天神）を呼ぶ能力を持っている。それは、雨を降らせ、風を吹かせるなどで証明する。

その記憶は、生前から今まで続いている。

(2) 金宝ブォの守護霊の生前と死後の経歴

名前：

両親がつけた名前：ジャムスレン、**社会がつけた名前**：ガハ・ドーチ。

解釈：ドーチとは、天神を呼ぶ力を持つ者という意。ガハとは、豚を意味する。ドーチは、天神や守護霊を呼ぶ力を持つ者という意味。ガハ・ドーチが乗り物である金宝ブォに憑依して語った内容によると、生前、天神に豚の生贄を捧げたことがゆえに、民衆に「ガハ・ドーチ」と呼ばれるようになった。神々に捧げる生贄は、牛、馬、駱駝、羊、山羊などであり、遊牧を営むモンゴル人の特徴を示す。しかし、上述したように、ホルチン・モンゴル人は、200年前から定住生活を送り始め、農耕化され、漢民族のように豚を家畜として飼育するようになった。それによって、豚が生贄として神々に捧げる現象が見られるようになった。

民族：モンゴル族。

性別：男性、年齢は、金宝ブォによると、生前から今まで、170数歳。

苗字：白

生前の居住地：本籍はダルハン旗ハラホショ村。

識字者：直接に説明していないが、トランスにおいて、『ブォの4冊の本』を末弟子に貸してなくした」と述べていることから識字者と推測する。

成巫：17歳の時成巫。世襲型ブォ。死後、ブォのあの世に赴き修行を行っている。治療能力、予知、予見、透視能力を持っている。その記憶は、生前から今まで続いている。

守護霊と金宝ブォの関係：守護霊は、金宝ブォの弟の妻（1966年生、農民）の父方の先祖である。

² 括弧は筆者注。

³ 現在のホルチン（科爾沁）左翼中旗である。当村は、現在、ホルチン区に含まれている。守護霊は、生前の記憶で語っている。

⁴ 老ブォによると、ブォの歴史や神話伝承を記した本と言われている。今は見つからない。

金宝ブォの家族と親族は、金宝ブォの弟夫婦の縁は金宝ブォの守護霊によるものと考えている。

(3) 月亮ブォと金宝ブォの守護霊の生前の関係

両守護霊がそれぞれの乗り物に憑依して語った内容に基づいている。

- ①ともに名が知られた力の強いブォ。
- ②生前2人とも「オンゴディン・タブン・テングリ」から賜った5つの旗を持っていた。この旗の力で雨を降らしたり、風を吹かしたりした。
- ③若い時にゴルロス⁵のソンギナ山で弟子入りして修行した。
- ④同甘共苦の仲間、互いに尊敬しあい、愛し合った仲間。
- ⑤ブォを火で焼く弾圧と一緒に2回経験。火の試練で無事だったのは、5つ旗のおかげである。
- ⑥重い症状のクライアントの治療において、協力し合った。

(4) 月亮ブォと金宝ブォの守護霊が死後、霊界における関係

・ともにホルチン・ブォのあの世であるベーリ・ソーリにいる守護霊同士。

・依然と尊敬しあい、愛し合っている。

・金宝ブォの守護霊が月亮ブォの守護霊に感謝の念を持つ。その理由は次のようである。

(a) 金宝ブォの守護霊が自分の乗り物である金宝を月亮ブォに弟子入りさせようと、月亮ブォに夢を与えて、金宝の住む村の名前まで教えてあげた。当時、金宝ブォは、身体の不調を巫病と知っていなかった。月亮ブォは、金宝ブォの守護霊にそのような夢を与えられて、3年間無視し続けた。3年目のある日、月亮ブォがクライアントに招かれて、ホルチン左翼後旗に行った。金宝ブォの守護霊が教えてくれた名をもつ村があるかどうかをたずねると、隣村であることが分かった。そして、その村に人を行かせて金宝を呼んできて、経緯を説明して弟子として受け取った。

(b) 金宝ブォの守護霊が月亮ブォの守護霊と月亮ブォに感謝している。なぜなら、自分の乗り物である金宝が月亮ブォとその守護霊のおかげで1人前のブォとなったからである。

(c) 互いに相手の乗り物をめぐって文句を持っている。

月亮の守護霊：月亮ブォへの恩返しとして表敬訪問が少ないと不満を示す。これも月亮ブォの思いと同じである。金ブォは、師匠に多大な恩を感じ、尊敬している。毎年正月と夏に表敬訪問している。

金宝ブォの守護霊：オンゴディン・タブン・テングリ祭祀の際、天神に叙する内容を忘れた。

4. オンゴディン・タブン・テングリ祭祀のきっかけと目的

月亮ブォと金宝ブォとその家族の語りによると次の通りである。

2011年旧正月（太陽暦の2月）、金宝ブォが師匠月亮ブォの宅を表敬訪問した。その日の夜、月亮

⁵ ゴルロスは、当時のジリム盟ゴルロス旗で、現在は吉林省に含まれる。ゴルロス・モンゴル族自治州と呼ばれている。清朝の時代にゴルロスでは名が知られたブォが多くいたため、そこに行って修行をするブォが多かった。

ブォと金宝ブォが同時にそれぞれの守護霊を招き呼んでトランスに入った。2人の守護霊が再会を喜び合い、生前の経歴をいろいろ語り合った。2人の守護霊が「オンゴディン・タブン・テングリ」を祭祀することを話し合った。

守護霊がトランスで教えた祭祀日と祭祀時間と生贄を捧げる方法は次のようである。

祭祀日：2011年旧暦9月9日（新暦2011年10月5日）である。なぜ9月9日かというと、天神とブォの守護霊の正月であり、祭天儀礼と守護霊祭祀を行う重要な日である。1回目の祭祀時間は、夜満天の星が現れた時である。テングリ祭祀は早朝から正午までの間に行うのがしきたりである。オンゴディン・タブン・テングリは、守護霊と関係があるため、守護霊の降臨する夜の時間帯に祭祀を行う。生贄を捧げる方法は、ボソ（立て）式である。ほかの供儀儀礼のときと違って、生贄を解体せず丸煮して、祭壇に立たせて捧げる。供儀祭祀において一般的に、生贄を9個に解体する。

オンゴディン・タブン・テングリは、両ブォの守護霊が生前、霊力を賜っていた天神である。オンゴディン・タブン・テングリを祭祀して、その守護と恵みを期待した。

5. オンゴディン・タブン・テングリ祭祀

(1) 1回目の祭祀

祭祀の儀式現場に女性の参加を排除する。司会者の月亮ブォ以外、男性のみ参加が可能である。

祭壇：一般的な祭天儀礼の場合、祭壇に酒を9盃、9本の線香、場合によって9個の神灯を供える。オンゴディン・タブン・テングリ祭祀の場合、祭壇に9種類の供物をそれぞれ9個分ずつ、合計81個分を供える。升に5種類の穀物を入れて、2人のブォの旗をそれぞれの方向に挿しておく。これは、ほかの祭天儀礼と端的に異なる点である。2人のブォの銅製の神偶（フレル・オンゴット）を供える。丸煮した生贄を南の方向に向かわせて祭壇に供える。

(2) 1回目の祭祀の実行

上述したように、旧暦9月9日は、ホルチン地方のシャマニズムにおいて、天と守護霊の正月に等しい重要な日として重んじられ、この日に祭天儀礼、守護霊の祭祀など神々の祭祀を行う。また、まだ口を開いていない⁶守護霊が口を開いたりする。月亮ブォの自宅では、この日に守護霊の指示でオンゴディン・タブン・テングリ祭祀を行うほか、数人の弟子が守護霊に生贄を捧げる儀式をも取り仕切った。1回目のオンゴディン・タブン・テングリ祭祀は夜行われるため、昼は、月亮ブォが弟子の守護霊祭祀のため司祭者を務めた。

a. オンゴディン・タブン・テングリに捧げる生贄の屠殺

地方性があると思われるが、1950年代以前、女性ブォが祭天儀礼を取り仕切る場合、男の人を前

⁶ 口を開くとは、守護霊が弟子入り中の後継者に憑依して、質問に答えることを指す。生前の経歴、名前、子供、住んでいた村などを教えてくれる。口を開くかは、一人前のブォになれるかどうかとかかわっている。

に立たせて行ったと語る老ブォがいる。現在、女性ブォが男性ブォより多くなり、現代社会に生きる女性ブォが堂々とさまざまな祭祀儀礼を取り仕切っている。現実の世界で月亮ブォと金宝ブォは師弟関係で、月亮ブォのブォ暦と年齢が金宝ブォより上ということで、月亮ブォは金宝ブォに権威を示し、金宝ブォは月亮ブォを師匠と恩人として尊敬している。しかし、両者の守護霊の年齢から言うと、金宝ブォの守護霊が月亮ブォの守護霊より 10 数歳上で、生前、弟として可愛がって世話したため、月亮ブォの守護霊は金宝ブォの守護霊を「お兄さん」と呼び尊敬している。

ホルチン地方で、ブォが取り仕切る供犠祭祀儀礼において、まず、生贄の屠殺の際、太鼓を叩きながら、口に含んだ酒を生贄に向かって吹きかけて、魂を天に送り届く。魂が抜かれた生贄は不思議なほどおとなしくなって倒れる。これは、神が当生贄を受け取ったと言う意味を示す。月亮ブォが生贄に向かって酒を吹きかけても生贄の羊はおとなしくならなかった。これを受けて、首を足で押さえて、呪文を唱え続けた。これは、この日に月亮ブォが弟子の守護霊の供犠祭祀を取り仕切ったときと端的に異なる光景である。弟子が守護霊に捧げた生贄の魂を天に届けようと太鼓を叩くと、生贄がすぐおとなしくなった。しかし、オンゴディン・タブン・テングリ祭祀において、生贄の様子が一変した。このことが、現場にいた弟子たちの前で自尊心が損なわれたこととなった。その原因は、オンゴディン・タブン・テングリを男性が主役となって祭祀していたからと金宝ブォが筆者に説明してくれた。

b. 祭壇の設置

祭壇を寝室であり、居間でもある東の部屋に南の方向に向かわせて設置した。食卓である丸いテーブルを前後に 2 つ並べておいた。祭壇に 9 種類の供物をそれぞれ 9 個分ずつ、合計 81 個を供えるよう工夫した。祭壇に供えた供物の種類は、次のようである。① 升に入れた両ブォの旗、酒、水、果物（市販のバナナ、りんご、葡萄、棗）、菓子（市販のビスケット）、市販のビニル袋入り牛乳、チーズ、砂糖入り炒り米、神灯、線香、花（金宝ブォの庭に育った赤ダリア）、ハダグ、北斗 7 つ星宝剑、鞭、② ② 升に 5 種類の穀物を入れて、2 人のブォの旗をそれぞれの方向に挿して安置した。③ 2 人のブォの銅製の神偶（フレル・オンゴッド）を供えた。④ ④ そして、丸煮えした生贄を南の方向に向かわせて祭壇に供えた。

c. 生贄を捧げるにあたって

儀式が夜行われた。金宝ブォが祭壇に向かって跪いて、酒を入れた杯にハダグ（札巾）を浸して撒き散らして捧げ続けた。その後ろに、月亮ブォが立って、太鼓を叩いてテングリたちの名を上げて、生贄を天神たちと、オンゴディン・タブン・テングリに叙して捧げた。一般的に、祭主は、跪いて酒を捧げ、その斜め後ろに司祭者ブォが神歌を歌う。今回は共同で祭主を務めているが、儀式を取り仕切っているのは月亮ブォである。生贄を叙する前に、生き血と 5 つの生ものを解体時に、それを忘れたことを気づき、「いつも忘れないが、今回忘れた」と反省した。解体した人が忘れた理由は、生贄の捧げ方はいつもと異なるためである。

月亮ブォは、神話から始まり、天の神々の名を上げ、生贄を褒めたたえて、よいものを天の神に捧げていることを申し、守護を乞うた。生贄を天神に叙するに 16 分を要した。



(図 3)

5 つの生もの。左から脾臓、膀胱、胆嚢、肝臓の尾状葉、脂肪の一部。



(図 4 左側) 伏せ式：解体された生贄を生きているように復元して捧げるのは、一般的なやり方。



(図 5 右側) 立て式：1 回目のオンゴディン・タブン・テングリ祭祀の祭の丸煮えした生贄の捧げ方。



(図 6) 1 回目の祭壇



(図 7) 両ブォが祭司を務め、
オンゴディン・タブン・テン
グリを祭祀している。

(3) トランス状態における守護霊の語りの特徴

- ①一人称で語る。
- ②シャマニズムの世界観の中で語る。
- ③生前当時の言葉を用いる。現代語をも分かる。
- ④生前と死後の内容を語る。
- ⑤当時の地名で語る。
- ⑥当時の社会について
- ⑦現代社会について
- ⑧霊界と人間の関係
- ⑨霊界同士の関係
- ⑩予見、予言
- ⑪教育。

夜、月亮ブォの家で、住み込みで弟子入りしている弟子がそれぞれ守護霊を招き呼び、身体に憑依させて口を開くことを期待した。生贄を捧げられた守護霊は、降臨して、生贄を受け取ったことを伝える場面もあった。一回目の祭祀後、両ブォの守護霊が降臨して乗り物に憑依した。すなわち、ブォがトランス状態となった。まず、金宝ブォがトランスに入った。それは、師匠である月亮ブォの意思だった。その日に内モンゴル民族大学の教授と院生、民間の写真家、民俗学者など取材者も 10 数人がやってきた。月亮ブォは、金宝ブォの力を取材者や弟子たちに見せたかった。これもある意味で、自分の弟子育ての成功を示す機会である。

両ブォの守護霊が降臨すると、純粋なモンゴル語でしゃべる。たまに中国語を混ざるが、それは、「君たちの言葉でこう言うが、モンゴル語で、こう言う」、「君たちの言葉でこう言うが、われわれはこう言う」と説明する。また、今では古い言葉に見られる「に」を意味する「ドル」(現在は、ド)、「ない」を示す「ボス」(現在は、ウゲイ)を使われる。また、意味は分かっているが、口語であま

り使われなくなった言葉を用いる。たとえば、妻は、ホルチン地方で、「ビル (bir/beri)」と言うが、両守護霊は、「エヘナル」と言う。ホルチン地方で現在、モンゴル語を中国語で混ぜてしゃべるのは一般的である。特に現代社会に出てきた名詞と現在の生活で欠かせない動詞を中国語で表現するのは一般的である。たとえば、携帯電話を中国語の「手機」、充電することを「充電」とそのまま使って、後ろにモンゴル語の動詞の継続形を使う。そのため、守護霊は、君たちの言葉でこう言うと言っているのは、実はモンゴル語に混ぜる中国語を指している。このように、守護霊は生前、漢民族の影響がない、あるいは少ない時代に生きていたため、純粋なモンゴル語でしゃべる。しかしながら、死後も霊という形で生きているため、現代人の言葉をも分かる。

両ブオの守護霊が降臨すると、月亮ブオの夫（1955 年生）と金宝ブオの妻が中心となって両守護霊をもてなす。月亮ブオの弟子も手伝う。守護霊は生前キセルでタバコを嗜んでいたのも、月亮ブオの夫は、両守護霊のため、キセルに煙草を入、火をつけて守護霊に渡す。また、酒を捧げる。市販の煙草を差し上げることもある。

a. 金宝ブオのトランス

①トランスの目的は、金宝ブオの守護霊が降臨したら素足で火を踏んで見せることである。金宝ブオの守護霊は、「オンゴディン・タブン・テングリを昔のように祭祀できなかったが、信仰心があることが大事である」と説明した。そして、生前祭祀していた順序を教えてくれた。

まずはテングリに、次にブオのあの世の 6 人のリーダーに祈りを捧げると説明すると、月亮ブオは、「6 人のリーダーのことを思い出したが祈祷しなかった」。金宝ブオの守護霊、「信仰心があればよい」と励ました。守護霊がまた、取材にやってきた皆さんは伝統文化を研究しようと真心をこめて頑張っているため、火を踏んで見せると説明。続いて、事前用意した火を床に移した。金宝ブオの守護霊が素足で火を踏みまわった。続いて、金宝ブオの守護霊が次のように託宣した。

②50 年以内、杏木の根っこの火にブオを焼くことが起こらない⁷。

③シャマニズムが盛んとなってきたが、いつかまた、ブオを弾圧することが起こる。そのとき、諦めてはいけない。

④ブオは修行が大事。現在、修行しようとしても難しいところがある。数人が頑張ってもシャマニズムを支えることができない。

⑤偽者ブオがいっぱいとなった。

⑥月亮ブオがオンゴディン・タブン・テングリを祭祀したことに感謝した。

一般的に、祭天儀礼後、生贄は調理され、集まってきた皆に振舞う。残りを翌日に食べてはいけなく、必ずその日に埋めておくのはしきたりである。今回は夜行われたため、夕食も済んでいたため、

⁷ 伝承によると、1911 年以前、数回に渡って、力比と弾圧のためブオを杏の根っこの火で焼いたことがある。両守護霊の語りから火の試練に参加して無事だった。

生贄を午前零時前に祭壇から下げて、事前に月亮ブォの自宅の北側の庭に掘ってあった穴に丸ごと埋めておいた。

b. 月亮ブォと金宝ブォの同時トランスー死者同士の交流



(図8) それぞれの乗り物に憑依して交流する両守護霊(左から2と3番目。左1と右1は、月亮ブォの夫と金宝ブォの妻で、両守護霊を酒でもてなしている)

金宝ブォの守護霊が退出した後、月亮ブォが守護霊を招き呼んでトランスに入った。守護霊がオンドルに腰をかけた後、荒い息を数回してから、会衆の皆に向かって、いつものように挨拶を行った。

金なるブォのあの世から降臨した。

お宅に入って、

赤子(乗り物である月亮ブォ)に憑依した。

集まってきた皆さんお元気ですか。

皆さんが「元気です」とお返事した。月亮ブォの守護霊の語った主な内容は次の通りである。

- ① かつてのオングディン・タブン・テングリ祭祀について説明。すなわち、ハンガ・テルゲ⁸と呼ばれる木造の車の上に祭壇を設け、煮あがった生贄をそこに乗せる。現在、ハンガ・テルゲすら見つからない。

⁸ ハンガ・テルゲとは、車のすべてが木でできた簡易な車で、牛に引かせた。馬に引かせると、車の構造が弱いと、壊れてしまう。

② ブォが増加していることを言及。

③ 乗り物である月亮ブォを叱った。

[1]弟子受け入れについて。狐やロスと呼ばれる蛇の精霊に選ばれたブォ病者(ブォになる運命の人)を弟子として受け入れないように注意しても、アドグス(獣、ここで月亮ブォ)⁹は同情心があるため、数人を受け入れた。

[2]オンゴディン・タブン・テングリ祭祀について、感じさせる方法で数回教えているにもかかわらず、ノートに書き留めなかった。

[3]力の強い守護霊が降臨すると火を食べたり、煙草やキセルの火がついているところを口に入れて嗜んだりする。月亮ブォの守護霊が、次のように怒りを表す。「(月亮ブォが) 煙草を嗜みすぎたため、歯が弱くなり、現在、口いっぱいプラスチックの入れ歯を入れた。わしが煙草の火のついているところを口に入れて飲むと入れ歯が解けてしまう。

④ 生前のライフヒストリーを語る。

10 歳にもなっていないとき、痙攣が発生して、仰向けに倒れた。ブォにみてもらうと、ブォ病と診断され、17 歳で博王旗¹⁰にブォとなった。

⑤ (月亮ブォを) 家の庭で祭壇を設け、そこで生贄を捧げ、外で祭祀儀礼を行うよう希望したが、祭祀日当時の午後天気が急変し、曇り、風が強くなった。そのため、屋内に変更して儀式を行った。このことに対して、守護霊は次のように説明。「われわれが日を選択するなら、風がない穏やかな日を選ぶことができるが、本日 9 月 9 日は、ブォが昔から大切にしているテングリを祭祀してきた重要な日である。旗を振って風を止めようとする時期になっていない」。

⑥ 生前 40 車で運ばれた杏木の根っこを燃やした火の試練に参加して無事だった。それは 5 つの旗のおかげである。「乗り物(月亮)をナサ・ブォの乗り物¹¹に弟子入りさせたのは、わしとナサ・ブォの生前のご縁と乗り物(月亮)を介してのつながりである」。

⑦ 首が損傷したことについて説明した。月亮ブォの守護霊が憑依するといつも目が白目となり、首を左の方に少し曲げて、西南の方向を見る姿勢をとる。今回憑依して、生前首が傷を負ったことについて説明した。それは、普通の人の目に見えないが、その行為が見える悪霊を馬に乗って鎮めていた。その間、100 歩以内に手綱と鞍に触ってはいけないというタブがある。それを注意したが、1 人が手綱を引っ張ってしまったため首に傷を負った。それ以降、首が曲がったままとなった。

守護霊は、生前の特徴をもって後継者に憑依するため、月亮ブォの守護霊が憑依すると首が曲がっ

⁹ 守護霊が乗り物に対して不満を表した際に使う語である。日常生活においても親が子供を叱るときに使う場合がある。

¹⁰ 当時の言い方。現在のホルチン左翼後旗。

¹¹ ナサ・ブォの乗り物とは、ホブル(1926—2007)・ブォである。

たままとなる。

続いて、月亮ブオの守護霊が、「お兄さんと会いたい」と言い出した。金宝ブオとその妻が、守護霊の前に酒を捧げながら跪いた。守護霊が非常に高ぶった振る舞いで、その妻に、「肥った豚が玄関にぶつけたように¹²、目が見えないが、この人と結婚したのは天から降りてきた福である。安定した生活を送りたいならば、この人に慈悲の心を持ちなさい」と諭した。トランスに入る前の金宝ブオは、月亮ブオの守護霊に非常に謙虚な態度で接した。その後、金宝ブオがトランスに入った。

両守護霊は再会を喜び合った。月亮ブオの守護霊は、生前、金宝ブオの守護霊より 10 数歳年下ため、金宝ブオの守護霊を非常に尊敬した。それが、肉体が減び守護霊となった今もそうである。月亮ブオの守護霊、「襟に縁があり、わたしにお兄さんがいる¹³。実は、お兄さんに太鼓の上で酒を捧げるのはしきたりである」と説明しながら、今太鼓を持っていないので、酒を金宝ブオの守護霊に捧げようとする、月亮ブオの弟子が酒を受け取って金宝ブオの守護霊に渡すと飲み干した。両守護霊の会話内容は以下の通りである。

① 生前の服、修行について

金宝ブオの守護霊が、「山羊の皮でできた服を着て洞窟で修行した。虱が巣を作るまでブオをした¹⁴。山羊の毛を内側に向かわせて作った服である。虱がひどかった」と何回も口にした。虱がひどかったが、病気は今より少ない。現在のブオは、修行していない、特に苦行を知らない。

月亮ブオの守護霊、「当時、みんな山羊の皮でできた服を着ていた。冬になると山羊の皮でできた服を着る以外ほかに着るものがない。現在の人が、山羊皮の服から離れてそれほど経っていない、3、40 年しか経っていない」。月亮ブオの夫が「そうである」と頷いた。

② 金宝ブオの守護霊が、月亮ブオに自分の後継者である金宝を弟子入りさせたことについて説明。「前世の縁があって、弟子入りさせた。おかげで、わしが現れることができた」と謝意を表明した。

③ オンゴディン・タブン・テングリの祭祀回数について

金宝ブオの守護霊が杯を 3 回床に投げた。落ちた方向は、2 回は南、1 回は北の方向だったため、「祭祀は後 2 回ある」と説明すると、月亮ブオの守護霊は、「男の賭けは、3 回ので、後 2 回ある」と加えた。

④ 月亮ブオの守護霊が乗り物である月亮ブオを叱った。「十数年前からオンゴディン・タブン・テングリを祭祀するように促したが、わしの乗り物が『テングリを正しく祭祀できなければいけないと拒んだ』。今回祭祀する際、叙する内容と順序を祭祀前に感じさせる形（靈感）で教えたが、

¹² ホルチン地方の言い回しである。よその豚が玄関にぶつけて死んでしまったら、それを食べることができる、すなわち、幸運に恵まれるという意味である。

¹³ モンゴルのことわざである。『元朝秘史』にも登場する。年上の人を尊敬するモンゴル人の習慣によるものである。

¹⁴ 洞窟で長く修行したことを暗喩している。

畜生は10数年来紙と筆を触ったことがないので、書けなかった」と怒りを表した。

⑤ 生前の居住と食について

月亮ブオの守護霊がこのように述べる。「かつては土作りの家に住んでいた。今の人々は皇帝の福を享受している。それでも満足しない。生きていたとき、米が貴重で、副菜として使おうとしても見つからない」。

⑥ 生前の弟子について

金宝ブオ、「わしは生前、3人の弟子を受け取った。ハイルチャット（ブオ）はわしの弟子である。覚えているかい」。

月亮ブオの守護霊、「このようにおっしゃるなら、お兄さんは弟を苛めていることになる」。
生前協力していたことをうかがわせる。

⑦ 月亮ブオの守護霊が金宝ブオに文句を隠喩で表明した。

月亮ブオの守護霊、「ブオであるわれらは、生前兄弟同様に仲がよかった。今それぞれ乗り物がいる。乗り物同士は、実の兄弟ではなくても、死ぬまで師弟関係である。親と子供のようなつながり¹⁵である。しかしながら、われわれはそれぞれの乗り物に憑依して会うには難しくなっている¹⁶」。

金宝ブオの守護霊、「会いたいなら、それぞれの乗り物に伝えたら会うことができる」。

月亮ブオの守護霊、「現在携帯があるからいいですね。時代がいいですね」。

金宝ブオの守護霊、「わしが生きていたときに使っていた木でできた神偶は、現在のもしもし（携帯電話）とまったく同じである。それを髪の毛に入れて持ち歩いた」。すなわち、受信機の機能を果たしたということである。

⑧ 当時の髪の毛について

生前の髪を豊かな表現で示している。なぜ髪の毛についての話ができてきたかと言うと、前出の神偶を髪の毛に入れて携帯していたと説明したからである。当時の髪の毛は、ブフリ・ウス（全なる髪の毛）、ビテグ・ウス（閉じられた髪の毛）、ウンドル・ウス（長い髪の毛）、オリヤブリ・ウス（巻き付けた髪の毛）だったと両守護霊が髪の毛について語り合った。

清朝時代では、男性でも女性でも髪の毛が長かった。両守護霊は清朝のとき生きていたため、髪の毛が長いのは理に合っている。それをモンゴル語でこのように豊かに表現している。これは、現在の人々にとって、思っても出てこない言葉である。

⑨ ラマとの闘争について

16世紀以降、仏教を広げる目的でシャマニズムを弾圧したため、仏教とシャマニズムの対立をめ

¹⁵ 月亮ブオは、金宝ブオより13歳年上という事実より、ホルチン地方では、弟子は師匠の守護霊に子なる弟子と呼ばれる。そのため、師匠ブオにも子なる弟子と呼ばれる。

¹⁶ 同時トランスになって乗り物の身体を使って語り合うことを指す。霊界では両守護霊は直接交流している。

ぐる神話伝承が多く、今も語られている。金宝ブオの守護霊が自分の生前の経験を次のように語る。
「生前、赤い系統（宗派）のラマと術の比べをした。ションホル寺院¹⁷の活仏にやられた」。

続いて、次回行なわれる祭祀の生贄の調達について金宝ブオの守護霊が次のように託宣。「襟に縁があり、今回の生贄をわしの乗り物が出した。来年は、願います。お兄さんが自分の乗り物（月亮ブオ）に出させてください。3年目は、両乗り物が出し合ってください」。



（図 9）

復建されたションホル寺院¹⁸

⑩旗を持つブオについて

金宝ブオの守護霊、「生前、旗を持ったブオが多くいた。しかし、オンゴディン・タブン・テングリの5つの旗を持ったブオが非常に少ない」。

1回目の祭祀は、両ブオにとって、初のことであり、伝統行事を復活させたことである。また、さらに副産物として、両守護霊の語り合いが、人々にとって、知識を得る貴重な機会となった。

(2)2 回目の祭祀

2回目の祭祀は、2012年旧暦9月9日（10月23日）である。

月亮ブオが、朝食後、直訳すると神灯の草と呼ばれる草を綿で巻いて、祭壇に安置する神灯の芯を丁寧につくった。神灯の草と呼ばれる草を弟子が先日野外から採ってきた。月亮ブオの弟子が20数人、月亮ブオの自宅に集まってきた。住み込みで修行をしている弟子意外、守護霊に捧げる生贄を師匠が取り仕切ってくれるようやってきた弟子もいる。また、月亮ブオの甥っ子とその家族も曾祖父である月亮ブオの守護霊、すなわち、月亮ブオの祖父の霊に羊の生贄を捧げた。その儀式を月亮ブオが取り仕切った。今回の祭祀は、1回目と違って、昼行われた。月亮ブオの弟子ホース（1970年生、男

¹⁷ ホルチン左翼後旗アグラ・ソム（内モンゴルの行政単位、日本の郡に当たる）ションホル山の麓にあった寺院で、1683年建造されたホルチン左翼後旗最初の寺院である。文革のとき破壊され、2012年復建された。

<http://www.nmgjsw.gov.cn/website/main/Article.aspx?fid=1d81c211-fef3-4345-8e91-380cf67d0152&fcol=122009>

¹⁸ 同上。

性)が今回のオンゴディン・タブン・テングリ祭祀の生贄代を出すと師匠の月亮ブォに 800 元渡した。これは師匠への恩返しであり、オンゴディン・タブン・テングリが守護してくれることへの祈願でもある。これによって、2 回目の祭祀は、3 人で祭祀したこととなった。

昨年、生贄の魂を月亮ブォがオンゴディン・タブン・テングリに捧げた際、生贄の羊がなかなかおとなしくならなかったことを受けて、今回は、当日の午前中、金宝ブォが師匠の家にやってくる前に月亮ブォが生贄を天に叙し、屠殺した。これは、共同で祭司を務めるところの金宝ブォにとって不敬な行為である。これについて、金宝ブォが「師匠の意図を心得ている。大丈夫」と答える。今回は、金宝ブォの妻が来なかった。ブォは弟山海（1969—2012）が運転する車に乗って 10 時過ぎに師匠宅にやってきた。

1) 2 回目のオンゴディン・タブン・テングリ祭祀の方法

2 回目の祭祀方法を、1 回目の祭祀が行ったその日の夜、2 人のブォの守護霊が同時に降臨して教えてくれた。

供犠羊とその解体：ヘブテー（伏せ）式。一般の供犠祭祀儀礼と同じく 9 個に解体するという意味。

祭壇の設置と供え物

祭壇の方向：南の方向に向かわせる。

祭壇を前回と同じく、月亮ブォの寝室であり、居間でもある東の部屋に設置した。月亮ブォ宅の食卓である丸いテーブルを窓のところから前後に 2 台並べた。窓側のテーブルの真ん中に升をのせ、旗を立てて安置した。供え物は窓側から順序に次のようである。2 本の花瓶に入れた造花、造花の真ん中に碗に炒り米を入れて、銅製の神偶を立てた。バター入り神灯 9 個、酒 9 杯、3 香炉にそれぞれ 3 本の線香、バター、チーズ、りんご、みかん、バナナ、飴をのせた炒り米をそれぞれ碗に入れて安置、水 9 碗、升に立たせた旗、旗の隣に銅鏡を安置した。もう 1 つのテーブルに、5 つの生もの、生き血、復元された煮あげた生贄を供えた。1 回目の祭祀のように、供え物を 81 個と求めなかった。

祭祀時間：昼間。

参加者：儀式を執り行う月亮ブォ以外、男性のみ参加。月亮ブォの弟子、家族、取材者などである。



(図 10)

2 回目祭祀の際の祭壇
造花の隣の刺繍入りポーチは
銅製の神偶入りである。



(図 11)

2 回目祭祀の際の祭壇
両ブォの旗

2) 2 回目の祭祀の実行

2 回目の祭祀は、1 回目と同じく、師匠の月亮ブォが叙し、弟子の金宝ブォが酒をささげ続けた。酒にハダグをつけて撒き散らす。月亮ブォは、弟子宝金の斜め後ろに立った。神話から始まり、天の神々の名を上げ、生贄を褒めたたえて、よいものを天の神に捧げていることを申し、守護を乞うた。所要時間 7 分。男性のみ参加で、儀式後、会衆が祭壇に跪いて拝み天神の守護を乞うた。生贄は、しばらく祭壇に供えた後、調理され、集まった皆を振る舞った。



(図 11) 2 回目の祭祀の祭壇。9 つに解体されて煮て、生きたように復元された生贄、伏せ式。

(図 12) 2 回目の祭祀を実行中。月亮ブォの弟子ホォスは酒を足す役を務めた。ホォスはこの役のため、自宅から自分の守護霊である父方の 7 代前の先祖が使っていた黄銅で作られた爛を持ってきた。それは、オンゴディン・タブン・テングリへの敬意である。

3) 月亮ブォと金宝ブォの同時トランス—死者同士の交流

いつもの通り、降臨してきて守護霊へのもてなしは月亮ブォの主人と月亮ブォの弟子たちである。まず、月亮ブォがトランスに入った。守護霊がオンドルに腰をかけると、会衆が跪いて尊敬の念を表

した。月亮ブォの守護霊が荒い息をしばらくしてからしゃべりだした。まず、会衆の皆に向かって、いつものように挨拶を行った。

続いて、月亮ブォの守護霊が、乗り物である月亮ブォに怒りを表した。「市販のたばこの嗜みはほどほどにと注意したにもかかわらず、吸い過ぎたせいで、肺臓の力が落ち、わしが憑依して息をするには苦しく感じている。乗り物が若いときに憑依すると、このような息苦しさはなかった」。この内容は、後継者である乗り物の身体の状態は守護霊がその体を使う際に影響されるということを示唆している。月亮ブォの守護霊が、「お兄さんと会いたい」と言ったので、月亮ブォの弟子金宝ブォがトランスに入った。両守護霊は再会を非常に喜び合った。



(図 13) 両守護霊は、それぞれの乗り物の身体を介して両手を交差して握手して再会を喜び合っている。



(図 14) 金宝ブォの守護霊が月亮ブォの守護霊との生前の仲の良さを牛の 2 本の角に喩え、両手の親指を立てて角のようにして説明している。



(図 15) 金宝ブォの守護霊が火を食べているところ

両守護霊がそれぞれの乗り物の体に憑依して、語った主な内容は次のようである。

- ① 月亮ブォの守護霊、「生前、お兄さんと仲がとてもよかった。お兄さんにお酒をささげています」と言って、杯に入った酒を金宝ブォの守護霊に捧げた。金宝ブォの守護霊が酒を受け取って、飲み干して、杯を噛み砕いて、霊力を示した。
- ② 月亮ブォの守護霊、「生前 2 人で火の試練に参加したが、時期が変わり、火の試練がやってくると、また、2 人で、それに参加するでしょう」。
- ③ 月亮ブォの兄の息子と嫁が曾祖父の前で跪いた。守護霊、「今日子孫¹⁹が、わしに羊の生贄を捧げてくれた。よく食べた。あなたたち生きている人間のように、口に入れて、噛み、胃袋にいっぱい食べることができないが、湯気をいたたくことができる。あなたたち、死ぬと霊がいるかどうかを分かるでしょう。死んでみないと死霊がいかに供え物を食べるかをわからない。わしは今、女性子孫を乗り物（月亮）としているが、この乗り物が死後、今度、子孫の中から男の子を乗り物として選ぶ。10 歳過ぎた男の子の口から泡が出て、仰向けに倒れた場合、わしが探したと分かつ。病院の治療を受けて治らない。子孫が、わしの末息子夫婦²⁰の墓参りをきちんとしして、先祖をよく尊敬している」と褒めた。

¹⁹ 月亮ブォの兄の息子一家。

²⁰ 守護霊の末息子とは、月亮ブォの父親万寿のことであり、月亮ブォの兄の子供たちからみれば、父方の祖父である。祖父の墓参りを継続しているということである。

解釈：月亮ブオの守護霊である祖父をブオにしたのは、赤の他人の亡きブオの霊である。すなわち、月亮ブオの祖父は非世襲型ブオであるが、亡くなって守護霊となった後、後継者を子孫の中から選び、世襲の形で継承されるようになったことを示す。



(図 16) 月亮ブオの守護霊が末息子万寿の孫、つまり自分の曾孫と話しているところ。

キセルをもっているのは月亮ブオの夫で、ペットボトル入りの酒を持っているのは俳優としても活躍した弟子である。

④ 金宝ブオの守護霊、「生前、アミンブへ弟と毛皮の服を着て、厳しい修行を行った。天を豚で祭って、『ガハ・ドーチ』(豚呼び手)という称号を得た。アミンブへ弟とわしは、牛の2本の角のように仲が良く、杯の酒、お茶碗のご飯を分け合った仲間である。苦しい修行をともにした。現在のブオは修行をしていない。苦勞をしていない。アミンブへ弟ちゃん、あなたの乗り物に誤りがある。しかし、天の秘密のため、ここで詳しく指摘しない。乗り物たちが、昔のように祭祀することができないが、頑張ってやった」。

⑤ 月亮ブオの守護霊、「お兄さん、来年、3回目の祭祀をどのようにしますか」。

金宝ブオの守護霊、「来年の生贄をわしに任せてください」。

月亮ブオの守護霊、「来年の生贄を黒豚にしましょう」。

金宝ブオの守護霊、「来年ハンガ・テルゲを見つかったら生贄をハンガ・テルゲの上で供えましょう。しかし、必ず、祭壇の外側に12、内側に5つの旗を立てる必要がある」。

月亮ブオの守護霊、「昔は、祭天儀礼において、モンゴル人しかできない。わしは、モンゴル人の子孫ではない。先祖は、山東済南府の人である。生前、私たちは、火の試練を乗り越えることができたのは、オンゴディン・タブン・テングリのお蔭である。2人の乗り物が年を取って、死んだ後、ブオのあの世で、功績がきちんと記録されるでしょう。現在、偽物守護霊、偽物ブオが出現しているが、火の試練が行うことになると、尾を挟んで逃げるでしょう」。

両守護霊が降臨して、依然と互いに尊敬しあい、生前の経歴を語り合った。そして、3回目の祭祀について話し合った。現在、ホルチン地方でブオの数が急激に増加していることをふれ、そこに偽物がいることを批判した。また、ブオの中に、守護霊がきちんと憑依していないブオも存在している。それは、経済的な利益が絡んであるからである。

ここで、筆者が1つ重要な情報を得た。それは、かつては、漢民族出身の人がモンゴル人の亡きブ

オの霊に選ばれてブオになっても、祭天儀礼を行なうことを認められなかったことである。仏教に帰依した後、ラマはオボ祭祀など地の要素が強い儀式を執り行うようになったが、祭天儀礼の祭祀をラマにも譲らなかった。これは、天は、モンゴル人にとって最高の神で、それに対する祭祀を異文化由来の宗教的職能者と異民族の人にさせなかったことを物語る。

(3) 3 回目の祭祀

1) 3 回目の祭祀の方法

3 回目の祭祀は、1 年前の 2 回目の祭祀日に両守護霊が話し合った内容に基づいている。また、祭祀日の先日の夜、金宝ブオの妻が、金宝ブオの身体に降臨した守護霊から祭祀について細かく伺って、携帯電話に録音した。祭祀日当日、調査のため金宝ブオの自宅に尋ねた際、それを見た村の女性住民に教えられたとき、金宝ブオの妻に対する尊敬の念が胸いっぱい溢れた。

祭祀日：2013 年 9 月 9 日（新暦 10 月 13 日）、正午。

祭祀地：金宝ブオの自宅。

司祭者：金宝ブオ。上述したように、2 回目の祭祀後、両守護霊は、3 回目は黒い毛をもつ豚を捧げると決めた。それを受けて、金宝ブオの妻がこの日のため、豚を飼育始めた。師匠の月亮ブオが弟子の家に来なかった。原因は、日々の文句のたまりである。この日に、月亮ブオが自宅でオンゴディン・タブン・テングリ祭祀を行なわれたが、調査ができなかった。

生贄：毛が黒色の豚。

祭壇：南西の方向に向かわせて設置した。



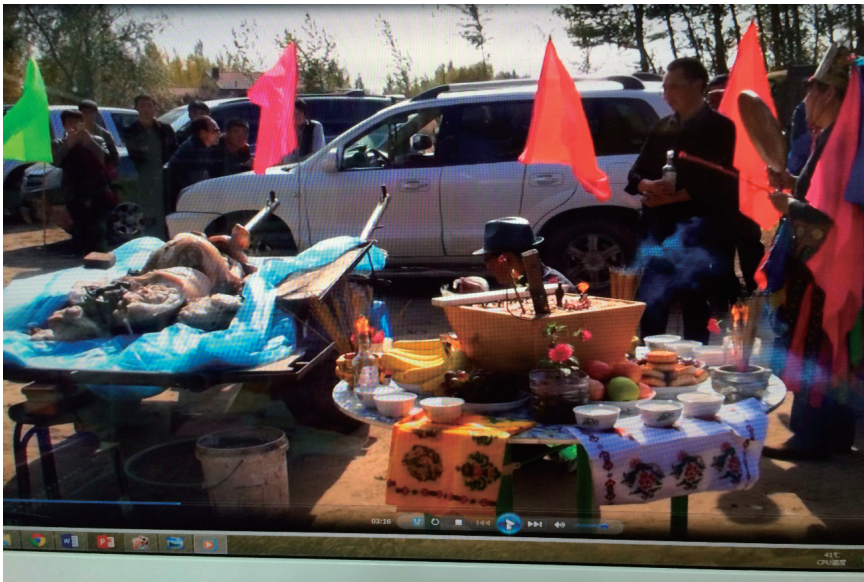
(図 17) 3 回目祭祀の祭壇

祭壇に、升に五穀を入れて、銅製の神偶と北斗 7 つ星宝剣、御柳の鞭を立たせている。バナナ、みかん、りんご、棗などの果物、月餅、バター、チーズ、線香、瓶入りの酒、碗入りの水、庭に育てた

花、ハダグを供えた。



(図 18) 煮上げて馬車の上に供えられた豚の生贄



(図 19) 2013 年旧暦 9 月 9 日、2 回目の祭祀を終えて、両守護霊が降臨して、話し合った内容にしたがって、豚の生贄を馬車に供えた。ハンガ・テルゲは、現在、ホルチン地方で一般的に使われなくなったので、馬車にした。馬車もあまり見られなくなった。

祭祀が始まると、金宝ブォがオンゴディン・タブン・テングリだけでなく、ほかの天の神々の名をあげ、生贄を叙した。所要時間 32 分。

3回目の祭祀は、金宝ブォの家では初めて行うため、大勢の見物者が集まった。中に、クライアントと金宝ブォに守護霊へ生贄をささげる儀式を取り仕切ってもらうためやってきたまだ修行中のブォがいる。祭壇は旗に囲まれ、祭祀の際、儀式を取り仕切る金宝ブォが跪いて、天の神々に酒をささげ続ける男性以外、中に入ることが許されなかった。女性は見る事が許された。生贄豚を祭祀後、調理され、皆にごちそうした。祭壇に供えられた果物や菓子を皆が天の恵みとして奪い合って食べた。

2) 金宝ブォの守護霊の降臨

儀式を見ようと近隣の村からたくさんの見物者と患者のため、夕方5ごろ、金宝ブォがトランスに入った。トランスにおいて、守護霊が当時の祭祀について言及することがなく、病氣治療に専念した。

まとめ

オンゴディン・タブン・テングリ祭祀は、現在、ホルチン地方で力が強いブォとして知られる師弟関係にある男女2人のブォによって行われた。ブォの力が強いというのは、守護霊の力によるものである。両ブォの守護霊は、生前力の強いブォだった。死後、その死霊が強い霊力を持つ守護霊となった。守護霊の記憶は、生前から今までと継続している。それを乗り物である現役のブォに憑依して語った内容からうかがわせる。3年にわたって、3回行われた祭祀は、伝統儀礼の復活に貢献しただけでなく、何より両守護霊の同時降臨とその語りが重要な意味をもっている。表は、守護霊降臨の長さである。

儀式の日	月亮のトランスの長さ	金宝のトランスの長さ
2011 年旧暦 9 月 9 日 (2011 年 10 月 05 日)	3 時間 10 分	1 回目 25 分 2 回目 43 分 (同時トランス)
2012 年旧暦 9 月 9 日 (2012 年 10 月 23 日)	2 時間 1 分	22 分 (同時トランス)
2013 年旧暦 9 月 9 日 (2013 年 10 月 13 日)	不明、調査しておらず。	1 時間 45 分

祭祀の役割と機能は次のようである。

[1]シャマニズムの世界観、知識の伝承に貢献。

オンゴディン・タブン・テングリ祭祀をめぐって、霊界の役割を見てきた。オンゴディン・タブン・テングリ祭祀を月亮ブォと金宝ブォの守護霊が乗り物に降臨して話し合っ、月亮ブォと金宝ブォに行なわせた。この祭祀において、守護霊たちが主体である。月亮ブォも金宝ブォも守護霊の意思に従って行なっていると周りの人々に言い聞かせている。両ブォは、オンゴディン・タブン・テングリに関する知識は、守護霊の教えによるものと語る。3年続いて行なわれた祭祀がシャマニズムの世界観

や知識を伝える機会となった。

チベット発祥で、チベットおよび中央アジアにおける主要な叙事詩である『ケサル王伝』は、現存するものの中では世界最長の文学作品とされている。『ケサル王伝』の伝承について、神・守護霊の教えが認められている²¹。たとえば、中国青海省のチベット遊牧民出身の吟遊詩人ツェラン・ワンドゥさんは毎晩夢の中で神からケサル英雄王物語を授かった〔宮本神酒男写真展〕²²。

このように、霊界の知と力の伝承が重要である。今回の祭祀もまさに守護霊の知識と伝承となった。



(図 20)

写真は、ツェラン・ワンドゥさん。

[2] 司祭者は、ブォであり、守護霊でもある。

祭祀儀礼を行ったのは、ブォであるが、それは、守護霊の意思によるものである。そのため、守護霊が降臨すると、守護霊自らが行ったこととしてもみている。祭祀は、ブォの行為は守護霊の行為でもあるという二重の構造をもつ。

(1) 守護霊が、ブォに憑依して、「わしが、今日はオンゴディン・タブン・テングリを祭祀した」と言った。

(2) ブォが、意識の平常状態で、「今日、守護霊の意思に従って、オンゴディン・タブン・テングリを祭祀した」と言った。

弟子ブォは、師匠ブォの弟子であり、師匠ブォの守護霊の弟子でもある。

[3] かつて行われていた儀式の復活と伝承に貢献。

弾圧によって、ブォの知識や文化の伝承に断層が生じた。そこで、ブォの守護霊の語りによって、復活されたり、口頭伝承化されたりする。オンドディン・タブン・テングリ祭祀の効果が続いている。

²¹ ケサル王伝 <https://ja.wikipedia.org/wiki/%E3%82%B1%E3%82%B5%E3%83%AB%E7%8E%8B%E4%BC%9D>
<http://www.china.org.cn/english/2002/Jul/36579.htm>

²² 宮本神酒男 <http://mikiomiyamoto.bakeneko.net/mugenshaman.htm>

ホオスの師匠月亮ブォが、「今後、オンゴディン・タブン・テングリを自ら祭祀しなさい」と言ってくれた。ホオスが自ら3年間続けて行なうことにした。2014、2015、2016年旧暦9月9日に3回祭祀を行なった。祭祀時間は、守護霊を守護するテングリということで、月亮と金宝ブォが1回目のとき夜行なわれたことを継承して、ホオスも夜行なわれている。2016年9月、ホオスに「祭祀してどのような効果があったか」と質問すると、「それはあった。村の村長選で再度当選された。また、弟子の中で、治療を行なって、かなり人気を集めている人が数人現れた。このように、皆を守護して下さっている」と語ってくれた。ホオスが行なっている祭祀に弟子たちも参加していることからオンゴディン・タブン・テングリの存在と祭祀を知らしめる好機会となった。オンゴディン・タブン・テングリ祭祀は、月亮と金宝ブォがそれぞれの守護霊の意思に従って、祭祀を復活させた。この時点で霊からの伝承と言える。ホオスが両ブォの取り仕切った祭祀を参与観察して、祭祀を自ら行なっている。これは、現役のブォからの伝承である。このように祭祀は、守護霊から人間へ、人間から人間へ、すなわち、師資相承である。師匠の守護霊と現役ブォであるホオスによって、守護霊を守護するオンゴディン・タブン・テングリを夜祭祀するというしきたりが生まれた。しかし、金宝ブォは、オンゴディン・タブン・テングリは、テングリ（天神）であるため、いくら守護霊と関係があるテングリとしても昼行なわれることが正しいと主張している。こうして、どこに重きを置くかによって、祭祀する時間が多様化した。

[4]守護霊という外部に存在する力への信仰を深める機能。更に霊界、すなわち、自然界の霊的存在に対する畏敬の念を深め、日常として生きる心へと変化させる機能をもつ。祭祀において、金宝ブォの妻が真摯な態度をもって取り込んでいる。その姿が筆者に非常に美しく見えた。天は最高の神であるため、祭天儀礼において、しきたりと師匠や守護霊に教えられた内容をなるべく守ろうとする。もし、祭祀者や集まってきた人々がミスを行したら、天と守護霊に謝り、許しと守護を乞う。



(図 21)

別の祭天儀礼のとき、ミスを行なった子供のそれぞれの父親がブォの守護霊に謝り、許しと守護を乞っている（2007年8月）。

供犠祭祀の際、生贄の内臓を洗った水などを入れる専用の穴を用意する。子供がそこにおしっこしたことは天に対する不敬な行為となる。

[5]守護霊は力であり、「生きた歴史」であり、文化であり、伝承の担い手でもある。守護霊の憑依によって、「語りの共同体」、「信仰の共同体」、「実践の共同体」が生成。

[6]教育。守護霊はその教えを守るよう要求する。(1) 道徳の面、(2) 伝統の面、例)、生贄の基準、

祭祀のやり方など。月亮ブオと金宝ブオとその家族ができるだけ、守護霊の指示通りにすることを心がけた。特に、金宝ブオの妻は、できるだけ守護霊のお告げどおりに実行し、ミスを起こさないように努めた。これは、守護霊とオンゴディン・タブン・テングリへの敬意でもある。

[7]守護霊とのコミュニケーションは、人間にとっても守護霊にとっても癒しである。

[8]市場経済を生きるホルチン地方で現在、ブオの数が増加している。これまでは、ブオが治療を行うのは主な仕事だが、今は一部のブオにとって、弟子を育てることが主な仕事になった。ブオ同士は弟子が何人いるか、今夜何人が太鼓を叩いたか、すなわち、弟子は何人が集まってきたかと質問する。守護霊が後継者を選ぶことによってブオになることから、受療先のブオに言われて、巫病の経験を経ずにブオとなることとなっている。その背後に経済的な利益が絡んでいる。これに対して、両ブオの守護霊は、本当に守護霊がない「偽者」と批判している。これは、ブオがこの現象を直接批判するより、人々に与える影響力と意義が強い。

長い間遊牧生活を送ってきたモンゴル人は、文字で記録してきたものはるかに少なく、口承による伝承が重要な役割を果たしてきた。その中で、民族の文化の伝承において、亡きブオの霊、先祖の霊など世を去った霊たちの果たしている役割を重視すべきだと思う。それが変わりゆく文化、そして、さまざまな原因で断層が生じたときに、復活と伝承の重要な役割を果たしている。

謝辞

オンゴディン・タブン・テングリ祭祀についての調査は、2011年から2013年まで、3年間続けて行いました。この調査を可能にしてくださったのは、株式会社カイクリエイツの今は亡き小林文雄（1949－2014）社長です。ここで、文雄社長に深くお礼を申し上げると同時に、微々たるものでありながら、小論を恩返しとしてお捧げしております。

参考文献

- 石田秀実編 2000『東アジアの身体技法』勉誠出版
- オ・ブルブ 2006『モンゴルのシャマニズム』中国民族出版社（モンゴル語）
- カール・A・ウィックランド（近藤千雄訳）2003『迷える霊（スピリット）との対話—スピリチュアル・カウンセリングによる精神病治療の30年—』ハート出版
- クラインマン（大橋英寿他共訳）1992『臨床人類学 文化のなかの病者と治療者』弘文堂
- 小松和彦（1994）2003『憑霊信仰論 妖怪研究への試み』講談社、第16版
- 佐々木宏幹編集 2007『民俗学の地平 桜井徳太郎の世界』岩田書院
- 佐々木宏幹（1996）2001『聖と呪力の人類学』講談社、第3版
- 佐々木宏幹・鎌田東二（1991）1993

『憑霊の人間学 根源的な宗教体験としてのシャーマニズム』 青弓社、第4版
サランゴワ 2011 「内モンゴル・ホルチン地方におけるシャーマニズムの再活性化の文化人類学的研究」
千葉大学社会文化科学研究科 博士論文（出版準備中）
棚次正和 2012 「生者と死者のスピリチュアルケア」
『死生学年報 2012 生者と死者の交流』 東洋英和女学院大学死生学研究所編 p. 1-24
〈ネット情報〉
シヨンホル寺院
<http://www.nmgjsw.gov.cn/website/main/Article.aspx?fid=1d81c211-fef3-4345-8e91-380cf67d0152&fcol=122009>
ケサル王伝
<https://ja.wikipedia.org/wiki/%E3%82%B1%E3%82%B5%E3%83%AB%E7%8E%8B%E4%BC%9D>
<http://www.china.org.cn/english/2002/Jul/36579.htm>
宮本神酒男 <http://mikiomiyamoto.bakeneko.net/mugenshaman.htm>

（さらんごわ・株式会社 カイクリエイツ、精神世界専門書店ブッククラブ回）

Guardian spirit of be (Shaman) and Culture tradition: For ongdin - taban - tnger ritual

Sarangowa

Summary:

This paper studies the rituals for Five-Spirits (Horchin: *ongdin taban tnger*/ literal Mongolian: *onggud-un tabun tengri*) that were conducted by a male shaman (*be/böge*) and a female shaman (*udgan/idugan*) among Horchin Mongols in the eastern part of Inner Mongolia. The two shamans have a master and disciple relationship. The aim of this paper is to show the content of the conversation between the spirits of the two shamans who possessed them during the rituals, and examine its influence on the traditional culture and ethnic history.

They conducted the rituals for 3 years; the two shamans conducted the rituals together for the first two years, and individually for the third year. The date the rituals were performed was on the 9th of lunar ninth moon. This paper is based on the fieldwork conducted on the sites of the rituals.

Shamans have been the main subjects but the spirits have been ignored in the previous research on Horchin shamanism maybe due to the difficulty in verifying the existence of spirits scientifically. However, Guardian spirits are the main characters for the local people and shamans. They are real beings for shamans and a source of wisdom, knowledge and the psychic power of shamans.

This paper attempts to take guardian spirits as a subject matter based on local perception. The guardian spirits of the shamans in Horchin shamanism are mainly the souls of the late shamans. The knowledge of late shamans is the memories of things during their lifetime, since their death and even those up to present. The guardian spirits of the two shamans had been close friends when they were alive and still maintain close relationship to each other.